

CAGLIERO 11

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.79 - 2015年7月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



友人の皆さん

今月、私たちは、宣教者のまなざしを南米に向け祈ります。ドン・ボスコがヴァルドックからパタゴニアの人々に目を向けたように。1875年に私たちの最初の宣教師たちがジェノヴァの港から南へ目を向けたように。しかし、このサレジオ会宣教師たちの思い、魂には何があったのでしょうか？ フランシスコ教皇は2015年世界宣教の日のメッセージで、これに答えました：「宣教は、イエス・キリストへの情熱、そして同時に、人々への情熱です。」そしてまさにこれこそ、ドン・ボスコの心に、彼のすばらしい宣教師たちの心に私たちが見いだすものです：イエス・キリストへの情熱と人々への、若者への愛です。主が私をすべての人への宣教 *missio ad gentes* に呼んでおられると、どうしてわかるのでしょうか？ 最初の「試験」はこれです。イエス・キリストとイエス・キリストに愛されている人々への私の情熱の「温度」は、どれほどでしょうか！

J. Baseris

宣教師顧問
ギジェルモ・バサニェス神父

内容に目を向けさせるのに大変有効な道具です」と言っています。南アフリカ管区長フランソワ・デュフル神父は「役に立つ道具」ととらえています。ブラジルのカンポ・グランジの管区長ジルダシオ・ドスサントス神父は書いています：「今朝、黙想のとき、『福音宣教の視点から読む第27回総会』を興味深く、喜びをもって読みました。簡潔で一貫性があり、明瞭で、確信と宣教の情熱をもって書かれていると感じました！」

福音宣教の視点から読む第27回総会

第 27回総会が閉幕してから1年、宣教部門は管区や共同体で考察を行うための資料を作りました。『福音宣教の視点から読む第27回総会』と題された文書は、短いながら豊かな宣教論が展開されています。第27回総会の宣教に関する内容をすべてまとめ、「たえず宣教中である」（『福音の喜び』25）状態で奉獻生活を生きられるよう、サレジオ会員を助けることを目指しています。

このアプローチは、自己中心や宣教の大胆さの欠如を乗り越えるよう私たちに呼びかける、と同文書は述べています。これは、自己保身の傾向から「司牧的回心」へ進むように、そして私たちの信仰と修道奉獻を喜びと真実をもって生きようにと私たちを動かす、宣教の精神です。

文書では、広報、青少年司牧、養成の各部門との効果的な協力への期待が述べられています。あらゆる司牧活動における第一次福音宣教の重要性和意義を再発見するためです。この第一次福音宣教が、キリストを知り、キリストに出会うための探求において若者と共に歩む方法に、よりよく光を当てる鍵であると文書は指摘します。デジタルの環境で、また移民、難民の間での、宣教するサレジオ会の存在を奨励します。福音宣教の方法として予防教育法を再発見するようサレジオ会員を招き、また教育と福音宣教の関係に光を当てます。

文書はまた、祈りと犠牲、特に病気や高齢のサレジオ会員による祈り、犠牲が、会全体の献身と宣教活動を力づける霊的な力であることを強調します。

はじめに宣教顧問ギジェルモ・バサニェス神父は書いています：「この冊子の巻末にある問い、そして会員や共同体の思いのうちに生じてくるにちがいないほかの多くの問いは-真剣に受けとめるなら！-私たちの修道院や事業に真の革命を起こすでしょう。」

この文書は先の4月にすべての管区に送られ、非常に好意的な反響が届いています：香港の中国管区副管区長アンドリュウ・ファン神父は「第27回総会最終文書の、宣教に関わる内



〔ビデオの紹介〕
<https://youtu.be/zEQaDIQkX4U>

神のみ心なら行きなさい、恐れなくて!



子どものころ、両親は毎週日曜日、聖体祭儀にあずかるため私を連れて教会へ行きました。ミサ後、私たちは主任司祭に会いました。その司祭は宣教師で、私たちに歌や踊り、祈り方を教えてくれました。神父様は遠隔地に暮らす人々を熱心に訪ね、とても優しく広い心でその人たちに接しました。私は子どものときから、小教区で働くほかのさまざまな会のヨーロッパ人宣教師司祭に出会いました。しかし、私の宣教師召命は、サレジオ会に入ってから強められました。私の国で働くサレジオ会宣教師の生きたあかしと聖性が、私のサレジオ会宣教師の召命を強めたのです。彼らの信仰のあかしと、貧しく素朴な若者への関心を見て、私もいつか彼らのような宣教師司祭になりたいと夢を抱くようになりました。

今日、多くの人は言います。福音を耳にしたことのない、イエスを知らないインドネシア人がたくさんいるので、インドネシアは宣教師を必要としていると。実は、宣教師になりたいと両親に話したとき、二人は驚き、少し悲しそうでした。母は言いました：「どうしてそんなに遠くに行ってしまうの?」ここでも宣教師は足

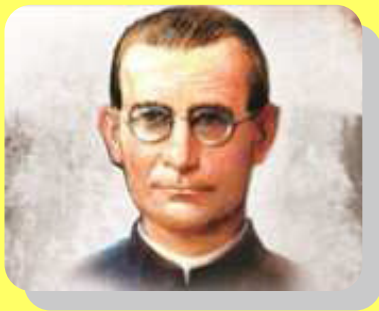
りないのに。でもそれが神様のみ心で、おまえの召命なら、行きなさい、恐れなくて。私たちはいつも祈りでおまえを支えるよ。」私の宣教師召命の歩みに同伴してくれたサレジオ会の養成担当者から感謝しています。インドネシアの私たちは宣教師からたくさんのもので頂いたので、たとえささやかな方法であっても、実りを分かち合うべきです。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」(マタイ10・18) 私たちは若者への喜びあふれるあかし人となり、キリストと人々を、境界を設けずに愛さなければならぬと思います。識別後、私は「はい」と答え、すべての人へad gentes生涯をかけてad vitam宣教師するため、自分自身を全面的にささげました。そして総長バスクアーレ・チャーベス神父は私をパラグアイに派遣しました。

宣教師として、私は全く知らない言語だったスペイン語だけでなく、グアラニー語も学ばなければなりませんでした。パラグアイ人の多くが話す二つの言葉です。また、私は“カルチャー・ショック”も経験しました。とても豊かでありながら、私のものとは異なる新しい文化や伝統に適応しなければならなかったからです。時々、インドネシアの食べ物や友達、家族が懐かしくなります。しかし、挑戦として受けとめ、忍耐をもって少しずつパラグアイの歴史を学び、人々と文化を受け入れ、愛するように努めています。ほかの文化の人々と出会うことで、私が当然のように思いこんでいたことに光が当てられ、偏見が取り除かれ、自分自身をよりよく知るようになるのは確かです。こういったことすべてが、修道召命、宣教師召命における私の成長を助けてくれます。

祈り、仕事、犠牲、共同体での生き方のあかし、兄弟サレジオ会員が共にいてくれること、私の人生の一部である若者たちの喜びなどを通して、サレジオ会宣教師として生きることができ、私は幸せで、喜びを感じています。こうしてイエス・キリストに従い、ドン・ボスコのように貧しく助けを必要とする若者を助けたいと、より強く動機づけられます。宣教師になりたいと望むサレジオ会員に言いたいと思います：私たちはキリストの愛を人々と分かち合うように呼ばれています、特に最も助けを必要とする、最も貧しい若者たちと。良い知らせを告げるようにと神は私たちを呼ばれます。宣教師になることを恐れなくてください。ドン・ボスコのカリスマをもって、心から言ってください：「ここにおります。私を遣わしてください」(イザヤ6・8)と。



インドネシア出身、パラグアイの宣教師
アウグスチヌス・ジョウ・ボマ神学生



サレジオの宣教の聖性のあかし

今年生誕125周年(1890年8月11日)を祝う尊者ルドルフ・コモレク神父(1890-1949)の生涯のあらゆる徳の中でも、際立っていたのは償いの精神でした。ルドルフ神父はブラジルで働くポーランド人サレジオ会宣教師で、その秀でた徳の生活のため、「聖なる父」と呼ばれていました。ルドルフ神父は、いのちに強く引きつけられるのを感じました。それは、神からの神秘的なインスピレーションのようでした。「目上たちは健康上の理由から、償いの厳しさを軽減するようルドルフ神父を促しました。神の僕が好んで思い起こしたアルスの司祭やベネディクト・ラブレのように、聖霊の照らしがルドルフ神父を導いていると確信していました。」



サレジオ会の宣教の意向

南米サウスコーン地域のサレジオ会員の社会への取り組みのために

南米サウスコーン地域のサレジオ会員が、自分たちの暮らす文化と対話し、社会的現実にも挑戦を投げかけることができますように。

第27回総会は“耳を傾ける”姿勢を取るようにと私たちに求めます。生活に、さまざまな状況に、この世、特に若者の期待に耳を傾けるようにと。なぜなら神は、生活、人々、出来事、歴史を通して私たちに語られるからです。サレジオ会員が、“前進する教会”の宣教する弟子として、その地域のさまざまな社会的現実を理解するために自らに問いかけることを学び、神のメッセージを理解できるようにと、私たちは祈ります。

